

## 主 文

本件上告を棄却する。

当審における訴訟費用は被告人の負担とする。

## 理 由

弁護人藤本猛の上告趣意は原判決の控訴趣意に対する判断に法令解釈の誤解があるという訴訟法違反の主張、原審で主張判断を経ていない・啞減刑事由説示の欠缺の主張、事実誤認及びこれを前提とする法令違反の主張並びに単なる量刑不当の主張に帰し、いずれも刑訴法四〇五条の上告理由に当たらない。（第一審判決の認定した事実によれば、被告人は豆腐小売業を営んでいる中被害者Aの妻であつて同じく・啞者であるBと懇ろとなり肉体関係を結ぶに至り終にはAと協議離婚の上正式に結婚しようと謀り、Bと共謀して寧ろAを殺害し事態を押し入り強盗の所為に装おうとして判示殺害の所為に及んだものであるというにあり、又、第一審判決を是認した原判決の認定した情状によれば、被告人は不具の身をもつてよくその家業である豆腐商の仕事に励み二児を養つていたものであるというにある。被告人が犯行当時からどのような行動をなし得る状態にあつたということはとりも直さず被告人が・啞者であつてもなお行為の是非を弁別しその弁別に従つて行動を自制する能力を有していた者であること、換言すれば、かような能力を有しない責任無能力の・啞者ではなかつたことを意味するものであり、原判決はその趣旨を判示しているものであるといふことができる。されば第一審判決は刑法四〇条後段を適用するに当り、同条前段を適用せず後段を適用する理由を判示しているものであり、これを肯認した原判決も同様これを判示しているものと解することができる。）

また記録を調べても刑訴法四一一条を適用すべきものとは認められない。

よつて同四一四条、三八六条一項三号、一八一条により裁判官全員一致の意見で主文のとおり決定する。

昭和三〇年一一月二九日

最高裁判所第三小法廷

裁判長裁判官	垂	水	克	己
裁判官	島			保
裁判官	河	村	又	介
裁判官	小	林	俊	三
裁判官	本	村	善	太 郎